

腰椎横突起骨折に対する新しい治療法

柴山元英¹⁾, 高橋育太郎¹⁾, 長尾沙織¹⁾, 川瀬 剛¹⁾, 長谷川一行¹⁾, 太田弘敏¹⁾

腰椎横突起骨折は比較的軽微と考えられがちだが、しかしながら強い痛みが続き、回復が長引くことがある。現在まで安静やコルセット、鎮痛剤などの通常の治療法以外の治療法は知られていない。今回、我々は新しい治療法を考案したので報告する。

対象および方法

新鮮腰椎横突起骨折で当科を受診した患者のうち、内臓損傷や他の骨折があったものを除外した4例に治療を行った。男性3例、女性1例で、うち2例は、救急車で搬送され、体動困難なほどの痛みがあった。平均年齢：37.0 (20～51) 歳であった。横突起の骨折数は1, 2, 3, 5個で、すべて片側性であった。

(治療) 腰椎神経根造影の要領で透視下、腹臥位で骨折部へ1% lidocaine を3ml 局所注射した。多発性なら全ての骨折を治療した。

評価：1. 歩行可能か否か。2. 痛みの程度。Visual Analogue Scale (VAS) を用いて来院時、注射後、1日、1週、3週後に調査。3. 病欠期間。4. 合併症の有無を調べた。

結 果

初診時に2例は救急車で運ばれ、歩けなかった。全員、注射後歩行可能となり、二度と障害されなかった。VASは初診時9.2が、注射後0.5になり、全例歩行可能となった。翌日には3.8と上がったが、1週後3.0、3週後0.6と下降した。病欠期間は1.8日であった(図1)。1例を除いて翌日から仕事に復帰した。職業は、事務、運転手、主婦であった。自衛隊員の1例で7日間休業したが、5個の骨折のうち1つは見逃され、治療されていなかった。全例、復帰後もしばらくの重労働は禁止したが、仕事への復帰は早かった。また、感染などの合併症は特に無かった。

考 察

腰椎横突起骨折は軽微と考えられがちだが、痛み

が長引き、長期の病欠になる事もある。現在まで痛み止めの外用剤や内服薬、ブレース以外に特別な治療法は報告されていない。しかしながら、Millerら²⁾は腰椎横突起単独骨折42人中20人が腹部内臓損傷を合併し、2人死亡、9人が手術を受けていたと報告している。横突起骨折は椎体骨折など他の脊椎骨折に比べ、内臓損傷と関連する事が多い、高エネルギー外傷であると述べている。またTewesら³⁾はプロアメリカンフットボール(NFL)の選手の腰椎横突起骨折29例を調べ、治療法はアイシング、薬物、コルセットなどで、平均3.5週の休業(0～104日)を要したと述べている。この群では内臓損傷は1例のみであった。鍛えられたプロの運動選手では内臓損傷は少なかったが、痛みが続き、復帰が遅れることがうかがわれる。

当治療法の効果は、劇的で、痛みは直ちに消失し歩けなかった患者が歩けるようになる。その後、痛みは、ある程度再発するが、ほとんどの患者で翌日から仕事に復帰できた。局所投与のリドカインの効果は1.5～2時間と言われているが、想像以上に効果が長続した。この理由として、まずは局所麻酔の薬理作用が働き、その作用時間が切れた後も、注射により、炎症反応をひき起こすサイトカインが薄

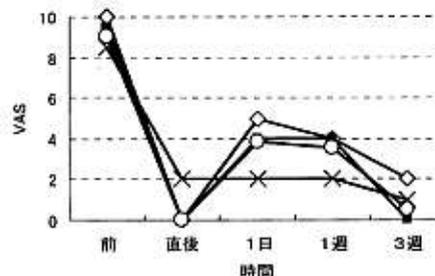


図1 治療前後のVisual Analogue Scale

New treatment for lumbar transverse process fracture. Local lidocaine injection reduces pain and sick leave : Motohide SHIBAYAMA et al. (Department of Orthopedic Surgery, Toyokawa City Hospital)

1) 豊川市民病院整形外科

Key words : Lumbar transverse process, Fracture, Sick leave